

エッセイ Essay



夢に導かれて…

主婦

入江 カリナ

私は遠いブラジル・ペルナンブコ州出身です。日系二世の主人とは、13歳の時に出会い、19歳で結婚し、21歳で来日しました。日本で上の子二人を出産しました。長男は17歳で現在ブラジルの高校生で、卒業後は日本に来る予定です。長女は15歳で豊橋の高校生で、妹の面倒をよく見てくれます。次女はブラジル生まれで、12歳です。不思議なことに、私は次女の出産直前に「子供が障害を持って生まれてくる」という夢を見ました。もしかしたら、それは神様が心の準備のために事前に教えてくれたのかもしれない。

そして、次女が生まれました。やはり次女は障害を持っていることがわかったのですが、それが何の病気、障害なのか医師にもわからず、不安な日々が続きました。障害のことは夢で見たこともあり、あまり驚きはしませんでした。次女にどのように接していけばよいのかわからず、苦しい思いをしました。

次女の診断には大変時間がかかりました。彼女が3歳の時、「プラダー・ウィリー症候群*」という難病であることがわかりました。私は冷静に受け止め、勉強の日々が始まりました。ブラジルでは医師の間でもこの病気についてはあまり知られていないため、治療に関して不安でいっぱいでした。そんな時、私はまた夢を見ました。それは「日本へ行きなさい。日本へ行けば大丈夫」というメッセージだったのです。私は再び来日することを決心しました。

日本の病院の先生は「プラダー・ウィリー症候群」についてよく知っていることがわかり、大変安心しました。娘の治療のために再来日し、本当によかったです。日本に心から感謝しております。

*食欲が止まらない(満腹感を感じない)、記憶力が無い、大声で騒ぐ、斜視、パニックになり物を投げる、疲れやすく睡眠リズムが不安定等

インターネットで同じ病気を持っているブラジル人の子供がいることがわかり、連絡をしましたが、返事がありませんでした。来日時にお世話になった通訳の方が偶然にもその家族の友人でしたので、紹介していただきました。ビックリしたのは娘とその子は5歳も年が離れているのに二人の顔はそっくりでした。こうして交流が始まり、いろんなアドバイスをいただいて、あまり困ったこともなく生活しております。

ブラジルでは障害を持っている子供は「スペシャルな子」と言われています。その子を支えるため家族全員が思いやりを持って、協力し合い、スペシャルな家族になっていきます。そして、家族みんなが幸せを感じます。そんなスペシャルな娘は5歳の時来日し、豊橋市内の小学校の特別支援学級で学び、現在は特別支援学校の中学部に通っています。毎日の生活を楽しみ、頑張っています。

最後にスペシャルな子供がいる家族にメッセージを送りたいと思います。「大変かもしれませんが、絶望しないでください。まず現実を受け止めることが大切です。絶対、明るいスペシャルな家族になります。お互いがんばりましょう。」私の経験が誰かのためになればよいと思い、講演会や本を書く夢を持っています。NPO法人ABT豊橋ブラジル協会での初の講演会を開催する予定です。



次女と仲良しツーショット



家族で京都旅行